大学体育研究　33：21 － 30，2011

原著論文

大学体育実技の授業に関する卒業生の満足度
－Ｔ大学の卒業生を対象として－

鍋山隆弘[1)]，富川理充[2)]，吉岡利貢[2)]，鍋倉賢治[1)]，宮下　憲[1)]

Satisfaction of alumni with the physical education classes as liberal arts in a university
–Based on the questionnaire survey of alumni of a national university–

Takahiro NABEYAMA[1], Masamitsu TOMIKAWA[2],
Toshitsugu YOSHIOKA[2], Yoshiharu NABEKURA[1], Ken MIYASHITA[1]

Abstract

On the basis of the questionnaire results of satisfaction of alumni in university physical education (PE) classes as liberal arts organized by the PE center of a national university (T-University), this study intended to provide a basis for restructuring a new university PE model matching the current Japanese social environment.

The subjects were 176 alumni of T-University and 99 of them responded. The collection rate was 56.3%. Questionnaire items for satisfaction in PE classes had three categories consisting of "curriculum design," "effort of instructors" and "facilities" including 12 details, as well as general satisfaction. General satisfaction in PE classes was significantly higher than in any other classes in the liberal arts at T-University. And it was suggested that the higher satisfaction was influenced by the syllabus and the content includes in teacher's specialty. It was suggested that the higher satisfaction was influenced by the satisfaction to the syllabus, content and teacher's specialty. 70% of all the participants answered that contents in PE class was useful. And 50% of all of them answered that the content about how to improve and maintain their health and fitness was useful. These results show that the PE center of T-University has been promoting effective education to achieve their educational target.

Key words: sports, lifestyle, lifetime, teacher, fun PE satisfaction of alumni

1）筑波大学大学院人間総合科学研究科（体育センター）
2）筑波大学体育センター

1. 緒言

大学教育では，1991年の大学設置基準の大綱化を機に大きな変革が起こった。一般教育科目，専門教育科目等の授業科目の区分に関する一律の規定が廃止され，各大学が独自の教育カリキュラムを編成できるようになった。それまで必修単位とされていた保健体育科目の開設あるいは単位数も各大学の裁量により決定されることとなり，体育実技のカリキュラム再編が全国的に進められた。その結果，体育実技の実施をとりやめた大学や必修科目から選択科目へと移行した大学も多い（徳永ほか，1996）。

一方，授業や課外活動で，特に大学教育への導入として教育的配慮の必要性が高い1，2年次生と直接かかわりのある体育教員には，大学教育を変革していく上でのリーダー的役割を期待されている（松岡，2001）。また，大学時代の体育における活動（Adams and Brynteson, 1992; Bryntensen and Adams, 1993; Casebolt, 2009; Supaporn and Griffin, 1998）や，運動，スポーツに関わる体験や学習（Forrester et al., 2006; Nahas, 1992; Tsigilis et al., 2009）が，生涯にわたり運動やスポーツを生活化させる可能性も数多く報告されている。たとえば，Adams と Brynteson (1992) や Brynteson と Adams (1993) は，体育実技の必修単位数が異なる大学の卒業生を対象に，健康のための運動の必要性の認識や運動習慣について調査し，体育実技の必修単位数が多い大学の卒業生ほど運動や健康に関する知識が豊富で，スポーツ活動への参加度頻度が高いことを明らかにしている。また，学生に対するアンケート調査やインタビュー調査を実施した Supaporn と Griffin（1998）は，学生に活動的な生活習慣を身に付けさせるためには，体育実技において“面白さ”や“楽しさ”を経験させることが重要であることを示唆している。さらに，Forrester et al.（2006）は，大学時代の短期のレクリエーションスポーツプログラムへの参加状況や，その心身の健康への効果の度合いが，卒業後のスポーツ活動継続の重要性への認識の度合いを決める重要な要因となることを示すと同時に，そのプログラムに対する学生の満足度が非常に高いものであったことを報告している。これらの研究結果をまとめると，“面白さ”や“楽しさ”を提供し，高い満足感を与えるとともに，健康や運動の重要性についての理解を進めることが生涯スポーツの推進や健康・体力の増進といった今日的課題の解決を目指す大学体育の使命の一つといえる。

保健体育審議会による「21世紀に向けたスポーツ振興方策について」（平成元年11月）の答申にも生涯スポーツの推進が掲げられているが，その実現のためには，初等教育から一貫性を持たせた大学体育の展開，工夫が必要である（小沢，1998）。加えて，全入時代を迎え高等教育を担う大学の大衆化が進むなか，大学教育では従来の知的エリートを対象としたものとは異なる授業内容が要求されてきている。たとえば，多様化する学生や社会のニーズに応え，「学生たちが満足感を持つことができるような授業や内容」（松岡，2000）にする必要などである。体育における具体的方策としては，学生による授業評価を基にカリキュラムを見直すことや施設や器具が十分でない場合には近隣大学との「単位互換制度」を整備・活用することなどが提言されている（池田，1998）。学生による授業評価は，大綱化に伴い大学体育の重要性を学内外に示す必要性が出てきたこともあり，FD（Faculty Development）活動の一環として積極的に行われるようになっている（石田ほか，2002；石手ほか，2008；師岡，1991；中路，2007；多胡と永田，2003；田村ほか，2003；生方，2006）。この傾向は，本研究で対象としたT大学体育センターにおいても同様である（本間ほか，1995；鍋倉と布目，1996；嵯峨，1996；橘，2005；蓬田ほか，2002）。これらの調査では，いずれにおいても高い評価が得られているが，大学体育を通して生涯スポーツの推進を図るため，あるいは生涯に渡って健康や体力を維持・

増進していくためには，大学での学びが卒業後の生活あるいは人生において，どのような点で役立ったのかといった視点からの評価が必要である。また，多様化する学生や社会情勢のニーズに対応した授業を展開するためには，現在の教育内容や目標が社会のニーズに合致しているのか否かを明らかにし，そして，実際の授業がその目標を達成するための内容を伴い，かつ満足感の得られるものであったかを学生のみならず，社会で活躍する卒業生の視点からも明らかにする必要がある。

そこで本研究では，1）学生時代に受講した体育実技の満足度を社会人の視点から調査すること，2）掲げられた教育目標が社会のニーズに合致するか否かを明らかにすること，を通して，今後の大学体育の課題を明らかにすることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象者

T大学在学中に，体育センターが開講する共通科目としての体育実技の受講経験がある卒業生を対象とした。本研究開始時に所在が明確となった176名に調査票を配付し，1978年から2009年（1991年，2001年および2002年を除く）にかけて16の学科を卒業した99名より回収できた（回収率56.3%）。99名のうち，男性は83名，女性は16名，在学中のサークル活動は，運動系および体育会系に所属していた者が48名，文化系および芸術系に所属していた者が27名，未所属が8名であった（未回答16名）。現在の職業別では，教員あるいは教育関係の仕事をしている者が55名，民間企業の会社員や団体職員が9名，大学院生が33名，その他が4名であった。

(2) 質問紙の配布および回収

本調査は，2008年11月から12月の2ヶ月間をかけて行った。質問紙の配付および回収は，留め置き調査法あるいは郵送調査法にて行った。

(3) 質問紙の内容

対象者の主な属性として，性別，在学中のサークル活動，卒業年，現在の職業などを質問した。

T大学において開講されている共通科目のうち，必修として単位数が定められている5科目（総合科目，外国語，国語，情報処理，体育）のそれぞれに対する総合的満足度について質問した。6段階の評定法（非常に不満足，不満足，やや不満足，やや満足，満足，非常に満足）を用い，「非常に不満足」を1ポイント，「非常に満足」を6ポイントとしてそれぞれを得点化した。さらに，体育のカリキュラム，教員，施設および効果についての満足度を，共通科目の総合的満足度と同様に質問し，得点化した。これらの他，印象に残っている体育実技の授業内容，望ましいと考える教師像や施設のあり方について，自由記述してもらった。

また満足度の他に，卒業後の生活にT大学体育センターが掲げる2つの教育目標（1：生涯体育：生涯にわたってスポーツの楽しさを享受し，豊かなライフスタイルを形成できる能力を身につける，2：健康・体力の増進：自己の健康・体力に対する認識を深め，自主的に健康・体力づくりを実践する能力を高める）が，現在の社会情勢や時代の要請に合致しているか否かについて，その程度を含めて「非常に合っている」から「まったく合っていない」の6段階で評価してもらった。

(4) 統計処理

対象者の属性，共通科目の総合的満足度，体育実技の授業展開や授業効果に関する満足度および教育目標と社会のニーズが合致しているか否かを，回答者全体に占める割合（%）として算出した。また，授業展開や授業効果に関する満足度の各項目の平均得点±標準偏差を算出した。

対象者の属性が満足度分布に及ぼす影響を確認するために，性別，在学中のサークル活動，卒業年，および現在の職業のそれぞれと各満足度においてクロス集計を行うとともにPearsonのχ^2検定を用いて検討した。

共通科目の総合的満足度得点の科目間および項目間の差について，対応のある一要因分散分析，およびScheffe法を用いて多重比較検定を行った。

統計処理は，すべてSPSS 16.0J for Windows（SPSS Japan Inc., Japan）を用いて行った。統計的有意水準はすべて5%とした。

3. 結果

(1) 対象者の属性と満足度分布の関係

対象者の性別，在学中の所属サークルおよび現在の職業は，方法に記したとおりである。これらの属性間で満足度分布に有意な偏りは認められなかった。

(2) 共通科目の総合的満足度

「総合科目」，「外国語」，「国語」，「情報処理」および「体育」の総合的満足度の各分布状況を図1に示した。“やや満足”以上の肯定的な回答は，それぞれ76.8%，60.5%，46.5%，51.6%および93.0%であった。満足度得点は，それぞれ4.2 ± 1.1，3.7 ± 1.3，3.4 ± 1.4，3.6 ± 1.2および4.6 ± 1.0と「体育」が最も高く，「総合科目」を除くすべての共通科目と比較し有意に高値を示した（図2）。

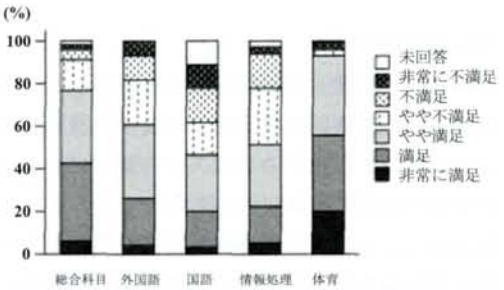

図1　共通科目の満足度の分布

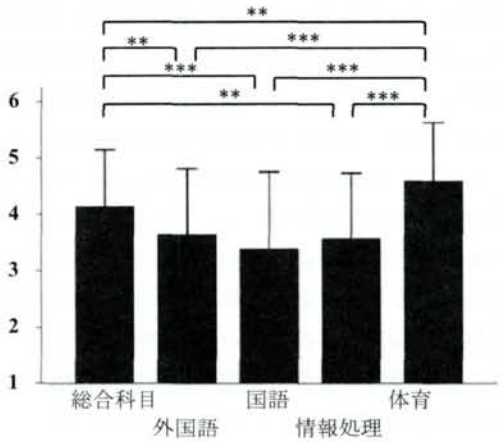

図2　共通科目の総合的満足度得点

** p<0.01, *** p<0.001.

(3) 体育実技の授業展開および授業効果に関する満足度

「カリキュラム」の「単位数」，「開講形態」，「開講科目」，「科目選択方法」および「成績評定」に関して，“やや満足”以上の回答は，それぞれ70.7%，79.8%，74.7%，49.6%および88.9%であった（図3）。満足度得点は，それぞれ4.0 ± 1.2，4.3 ± 1.0，4.4 ± 0.9，3.9 ± 1.1および4.7 ± 0.8と，他の項目と比較し「科目選択方法」が顕著に低い値を示した。これらの項目に対する満足度と「体育」の満足度の関係について検討すると，「単位数」（r = 0.69），「開講形態」（r = 0.56），および「成績評定」（r = 0.62）と「体育」の満足度の間には有意な相関関係が認められたが，「開講科目」（r = 0.13）および「科目選択方法」（r = 0.20）との間には，有意な相関関係は認められなかった。

「担当教員」の「意欲」，「教授方法」，「コミュニケーション」，「授業計画」および「教育内容（専門性）」において，“やや満足”以上の回答は，それぞれ90.9%，89.9%，89.9%，84.9%および92.9%とすべての項目において高い割合を示した（図3）。満足度得点も同様に，4.8 ± 1.0，4.7 ± 1.0，4.7 ± 1.0，4.5 ± 1.1および4.8 ± 1.0といずれにおいても比較的高い得点が得られた。これらの項目に対する満足度と「体育」の満足

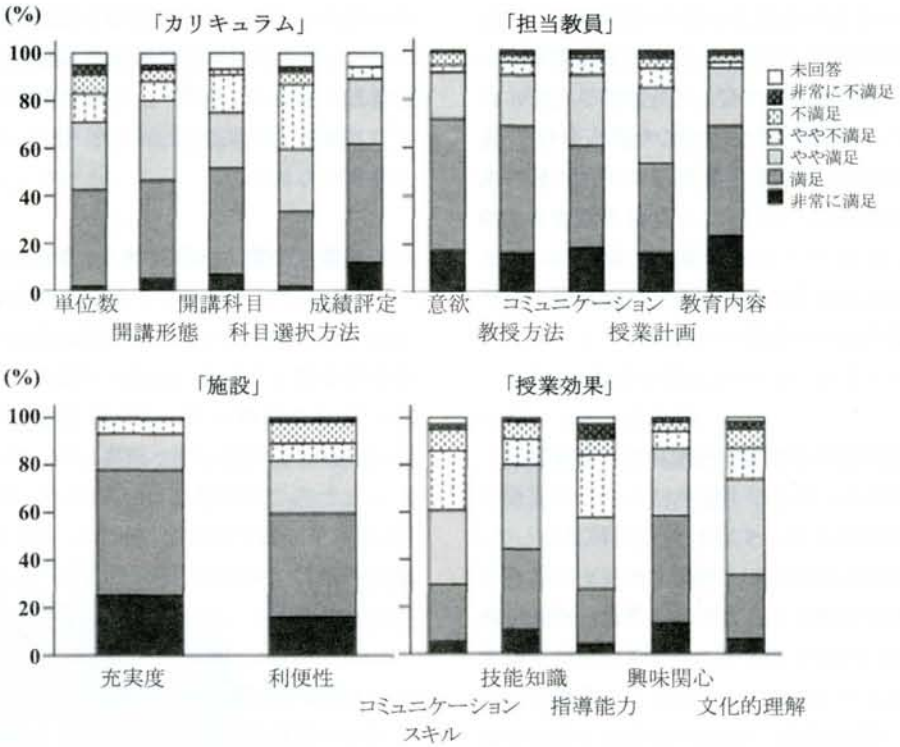

図3　体育実技の「カリキュラム」,「担当教員」,「施設」,「授業効果」に関する満足度の分布

度の間には，すべて有意な相関関係が認められたが,「意欲」(r = 0.53),「教授方法」(r = 0.49),「授業計画」(r = 0.59),「教育内容（専門性)」(r = 0.60）と比較して「コミュニケーション」の相関係数（r = 0.29）は顕著に低かった。

「施設」の「充実度」に対する“やや満足”以上の回答は93.0％，満足度得点は5.0 ± 0.8と非常に高い満足度を示した（図3)。一方「利便性」においては，“やや満足”以上の回答が81.8％，満足度得点が4.5 ± 1.2と比較的高い満足度が得られていたが,「充実度」と比較すると，満足度分布，満足度得点とも有意に低い値を示した。両項目の満足度と「体育」の満足度の間には，ともに有意な相関関係が認められたが，相関係数は低かった（充実度：r = 0.24；利便性：r = 0.20)。

「授業効果」の「コミュニケーションスキル」,「技能・知識」,「指導能力」,「興味・関心」,「文化的理解」における“やや満足”以上の回答は，それぞれ60.6％，79.8％，57.5％，86.9％および73.8％であった（図3)，満足度得点は，それぞれ3.8 ± 1.1，4.3 ± 1.1，3.7 ± 1.2，4.5 ± 1.1および4.0 ± 1.1と「コミュニケーションスキル」と「指導能力」が低い傾向にあった。これらの項目の満足度と「体育」の満足度の間には，すべて有意な相関関係（コミュニケーションスキル：r = 0.50；技能・知識：r = 0.61；指導能力：r = 0.58；興味・関心：r = 0.48；文化的理解：r = 0.44）が示された。

「カリキュラム」に関する5項目,「担当教員」に関する5項目,「施設」に関する2項目，および「授業効果」に関する5項目のそれぞれの項目毎の平均得点は，4.3 ± 0.7，4.7 ± 0.9，4.7 ± 0.8，4.1 ± 0.9となり,「担当教員」および「施設」は,「カリキュラム」および「授業効果」と比較すると高い満足度が得られていた。

自由記述に挙げられていた主な回答のうち，体育実技で印象に残っている内容としては「ス

ポーツの楽しさを感じられた（9名）」といった主旨の回答が，望ましいと考える教員像としては「運動に重要性や楽しさを実感させてくれる（7名）」や「専門性を生かした授業を行う（6名）」といった主旨の回答が目立った。体育実技の授業効果については，「運動習慣が身についた（4名）」や「気分転換になる（5名）」といった肯定的意見が多かった一方，「生涯スポーツや健康のための運動の重要性をアピールして欲しい（2名）」といった意見も挙げられた。

(4) 自由科目および集中授業に対する満足度

「自由科目」および「集中授業」の満足度について回答した者，すなわち自由科目として，あるいは集中授業として開講されていた体育実技の授業を受講したことのある者は，それぞれ24名および32名であった。そのうち，“やや満足”以上の肯定的な回答は，「自由科目」が81.2％，「集中授業」が90.6％であった。これらと通年授業の「体育」の満足度分布（93.0％）との間に有意な差は認められなかった。満足度得点は「自由科目」が4.6±1.7，「集中授業」が4.8±1.6であり，「集中授業」の満足度得点は「自由科目」あるいは通年授業の「体育」のそれ（4.6±1.0）と比較して高値を示す傾向にあったが，これらの間に有意な差は認められなかった。また，自由記述からは「集中授業で様々な体験ができた（3名）」，「通年の授業ではあまり成果が感じられなかった（1名）」という意見が得られた。

(5) 卒業後の生活への貢献

「体育の授業で学んだことが卒業後の生活において役に立ったか」との質問に対しては，“非常に役に立った”が14.1％，“役に立った”が35.4％，“やや役に立った”が21.2％と，70％以上の者が役に立ったと回答した。また，役に立ったと感じた項目について表1にまとめた。「スポーツに関する技能」(64.3％)および「健康・体力の維持・増進方法」（58.6％）に対して多くの者が役に立ったと回答した。（表1を参照）

(6) 大学体育の満足度と卒業後の運動習慣の関係

現在の運動習慣は，「ほぼ毎日」運動する人が15.2％，「週3・4回程度」が21.2％，「週1・2回程度」が31.3％，「月に2・3回程度」が12.1％，「年に数回程度」が12.1％そして「まったくしていない」が8.1％であった。

各項目の満足度と卒業後の運動習慣の関係について検討すると，「開講形態（通年型）」(r =

表1　体育の授業で学んだ以下の内容は卒業後の生活に役立ちましたか？

	はい	いいえ
スポーツに関する技能	45（64.3％）	25（35.7％）
スポーツに関する知識（歴史，ルール，戦術など）	30（42.9％）	40（57.1％）
スポーツ技能の習得方法	22（31.4％）	48（68.6％）
健康・体力の維持・増進方法	41（58.6％）	29（41.4％）
運動障害や疾病に関する知識・対処方法	8（11.4％）	62（88.6％）
他者とのコミュニケーション方法	15（21.4％）	55（78.6％）
リーダーシップの取り方	6（8.6％）	64（91.4％）
様々な企画の立案・実行方法	4（5.7％）	66（94.3％）
忍耐力	13（18.6％）	57（81.4％）
体育の授業を通して知り合った人間関係	20（28.6％）	50（71.4％）
スポーツに対する苦手意識が消えた	11（15.7％）	59（84.3％）
人に教える楽しさを味わった	3（4.3％）	67（95.7％）

－0.25)，「教員と学生のコミュニケーション」(r＝－0.21)，「授業効果」としての「コミュニケーションスキル」(r＝－0.32) に対する満足度が高かった者ほど高い運動習慣を獲得していることが示された。

(7) T大学体育センターの教育目標と社会ニーズの合致

T大学体育センターの教育目標，「生涯体育」と「健康・体力の増進」は現在の社会情勢や時代の要請に合致しているかについては，“やや合っている”以上の肯定的回答が93名で，93.9%を占めた（未回答1名）（図4）。

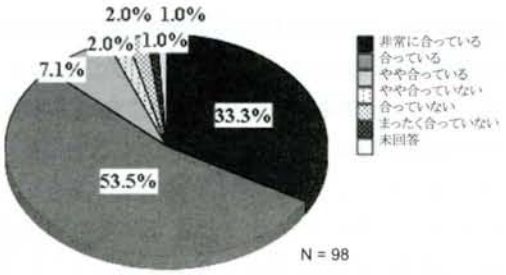

図4　T大学体育センターの授業目標（「生涯体育」と「健康・体力の増進」）は，現在の社会情勢や時代の要請に合致していると思うか

4. 考察

T大学が開講する必修の共通科目のうち，体育センターが担当する「体育」の受講経験を持つ卒業生を対象に，主にその満足度に関するアンケート調査を行った。本研究は，社会で活躍する卒業生の視点による大学体育の評価，すなわち社会情勢や大学体育に求められるニーズを反映した評価によって，これまでの大学体育のあり方を見直す資料を得ることが目的であった。

T大学の必修科目として開講されている共通科目の中でも，体育センターの開講する通年授業の「体育」は非常に満足度の高い授業であったことが明らかになった。この要因として，T大学が開講している豊富な科目数（毎年30科目程度）が考えられたが，「開講種目（種類・数)」や「科目の選択方法」の満足度と「体育」の満足度の間の相関関係は，その他の項目と比較して顕著に低かった。また，「科目の選択方法」についての評価は高くなかった。また，この結果は，自由記述にみられた否定的意見をも反映している。すなわち，1）学部・学科毎に受講できる科目が限られていること，2）科目毎に受講できる人数が限られていること，3）希望人数が超過した場合の抽選方法が科目毎に異なること，などが自由記述でも指摘された。このような不満足感は，結果として運動習慣の獲得や生涯スポーツの定着に対して負の影響を与える可能性を有する。現在は，1年次生時に希望科目を受講できなかった学生に対して2年次生時には優先して希望科目を受講できるシステムを整備しているが，加えて，抽選方法の統一化を図るなど可能な限り対応する必要があるだろう。「担当教員」の「教育内容（専門性)」や，「施設」の「充実度」については，高い満足度が示された。これらの項目で高い満足度が示された背景には，T大学の特長が関係している。すなわち，T大学は体育学部を有する総合大学であり，専門的なスポーツ活動にも対応し得る施設や用具を用い，専門とする教員が専門的な知識に基づいた教育を行っている。

「カリキュラム」に関して「単位数」および「開講形態（通年)」および「成績評定」に対する満足度と「体育」の満足度との間に中程度の相関関係が認められた。一方，前述のように「開講科目」や「科目選択方法」との関係は弱かった。また，「教員」に関しては「意欲」，「教授方法」，「授業計画」および「教育内容（専門性)」との間に中程度の相関が認められたのに対して「教員と学生のコミュニケーション」との関係は弱かった。また「施設」の「充実度」や「利便性」との相関関係も弱かった。以上の結果は，学生のニーズを満たす多様な科目を開講するこ

とや施設の充実は整備されるに越したことはないが，当然ながら，満足度自体は，実際の授業内容（計画を含む）や教員の専門性に依存することを示している。また，このことは，授業を通して得られた効果への満足度と「体育」への満足度との間に，すべての項目において中程度の相関関係が認められたことによって強調される。すなわち，授業効果の高い「教員の専門性を生かした満足度の高い授業」が，「体育」の満足度に最も強く関与するといえる。

集中授業は4～5日程度で完結するが，1年間を通して開講されている「体育」と同等の満足度分布および満足度得点を示した。自由記述にもみられたように，短期集中で行われることが技術の向上に有効（“通年の授業ではあまり成果が感じられなかった”との記述から），あるいは学外の授業では宿泊を伴うものもあり，非日常的な環境で行う運動・スポーツ活動を通して“様々な体験”ができることがその要因といえる。これまでに，大学の体育実技の授業として開講されたキャンプ実習の受講者は，受講していない者と比較し自立志向性（Forrester et al., 2006）が向上する傾向にあることが報告されている（蓬田ほか2002）。今後は，通年授業および集中授業それぞれの特長を生かした，より自由で多彩な授業展開を検討する必要があるだろう。また，自由意志で受講する自由科目においても，満足度は必修の通年科目と同程度であった。このことは正負の二つの解釈，すなわち「強い意思のある受講生をも満足させた」あるいは「強い意志で受講しているにも関わらず，満足度は必修科目と同程度にとどまった」に分かれるが，いずれにしても，必修の通年授業と集中授業の両者を融合した開講形式も可能な自由科目を充実させることも今後の課題といえる。

最後に，卒業後の生活に対して，「体育」が役立ったと回答した者が全体の70％程度を占め，中でもスポーツ技能を修得したことや健康・体力の維持・増進方法について学べたことが役に立ったという回答が多かった。スポーツ技能の習得は，生涯にわたってスポーツを楽しむ礎となるものと考えられる。また，健康・体力の増進は，T大学体育センターが掲げる教育目標に合致するものである。加えて，T大学体育センターが掲げる2つの教育目標（1：生涯体育：生涯にわたってスポーツの楽しさを享受し，豊かなライフスタイルを形成できる能力を身につける，2：健康・体力の増進：自己の健康・体力に対する認識を深め，自主的に健康・体力づくりを実践する能力を高める）が，現在の社会情勢や時代の要請に合致していか否かについての質問では，9割以上の卒業生が合致していると回答した。このことは，これまでT大学体育センターが教育目標を達成するための効果的な授業を展開してきたことを示唆している。一方，本研究の結果，卒業後の運動習慣に「体育」での教員とのコミュニケーションや学生相互のコミュニケーションに対する満足度が関与していることが明らかとなった。これらの満足度は，「体育」の満足度との関係は弱かったものの，長期的には，スポーツを通したコミュニケーションの経験が卒業後にスポーツに親しむ姿勢を形成した可能性を示唆しており，今後は，教員と学生あるいは学生相互のコミュニケーションを促進する工夫も必要といえる。

なお，本研究の限界として，卒業生の明確な所在を把握することが困難であり，対象者数が少なくなってしまったこと，所在が明確になっても職員や大学院生としてT大学と関わりのある者が多くなってしまったことが挙げられる。今後，より多くの卒業生を対象として，現在の教育目標および社会情勢および学生のニーズに関わる項目に対する効果について検討する必要があるだろう。

5. まとめ

本研究は，これまでにT大学において体育センターが担当してきた必修の共通科目の体育

実技の授業がどのような満足感を与えているのか，卒業生を対象としたアンケート調査をもとに検討し，新たな大学体育モデルを構築するための基礎資料を得ることを目的とした。

体育実技の総合的満足度は，他の共通科目と比較し高いことが明らかとなった。そして，この満足度には，T大学の特長である科目の多彩さや充実した施設よりはむしろ「教員の専門性を生かした満足度の高い授業計画・内容」が影響していることが示唆された。

また，体育が卒業後の生活に役立っていると回答した対象者が70％を上回り，中でも，教育目標の1つである「健康・体力の維持・増進方法」を学べたことが役立っていると回答した者が全体の50％程度を占めた。この結果は，これまでT大学体育センターが教育目標を達成するための効果的な授業を展開してきたことを示唆している。

参考文献

1) Adams TM, and Brynteson P (1992) A comparison of attitudes and exercise habits of alumni from colleges with varying degrees of physical education activity programs. Research Quarterly of Exercise and Sport, 63: 148-152.

2) Brynteson P, and Adams TM (1993) The effects of conceptually based physical education programs on attitudes and exercise habits of college alumni after 2 to 11 years of follow-up. Research Quarterly of Exercise and Sport, 64: 208-212.

3) Casebolt k (2009) Physical activity in higher education, Pennsylvania Journal of Health, Physical Education, Recreation & Dance, 79: 28-30.

4) Forrester S, Arterberry C, and Barcelona B (2006) Student attitudes toward sports and fitness activities after graduation. Recreational Sports Journal, 30: 87-99.

5) 本間崇，千足耕一，布目靖則，南隆明（1995）正課体育スキー実習における学生による授業評価．大学体育研究，17：37-48.

6) 池田延行（1998）大学体育に何を求めるのか－協力者会議報告書および審議会答申からの提言－．体育の科学，48：465-468.

7) 石田博也，星島葉子，矢野博己，米谷正造，木村一彦（2002）大学体育の今後のあり方に関して－K大学健康体育実技履修選択の動向からの考察－．川崎医療福祉学会誌，12：311-319.

8) 石手靖，松田雅之，村山光義，加藤幸司（2008）なぜ体育実技を選ばないのか？－体育実技科目非履修者アンケート結果報告－．体育研究所紀要，47：1-12.

9) 松岡信之（2000）21世紀の大学体育のあり方．体育科教育，48：30-32.

10) 宮丸凱史（2001）筑波大学における共通体育のカリキュラム編成の経緯と今後の問題．大学体育研究，23：49-61.

11) 森田啓（2000）大学体育の意義・役割に関する一考察．大学体育研究，22：1-8.

12) 師岡文男（1991）上智大学体育実技受講生の大学体育必修制度に対する意識と体力診断テストからみた授業効果について（事例研究）．上智大学体育，24：21-34.

13) 鍋倉賢治，布目靖則（1996）正課体育「ジョグ＆ウォーク」の成果に関する一考察－身体活動状況，全身持久力と意識変化－．大学体育研究，18：31-42.

14) Nahas MV (1992) Knowledge and attitudes changes of low-fit college students following a short-term fitness education program. Physical Educator, 49：152-159.

15) 中路恭平（2007）大学体育実技における学生の満足度と授業評価に関する分析．アカデミア自然科学・保健体育編，13：19-37.

16) 小沢治夫（1998）大学体育に何を求めるのか－中等教育の立場から－．体育の科学，

48：461-464.
17）嵯峨寿（1996）目標達成度・満足度への貢献度からみた筑波大学一般体育における学習内容の評価．大学体育研究，18：31-42.
18）Supaporn S, and Griffin LL (1998) Undergraduate students report their meaning and experiences of having fun in physical education. Physical Educator, 55: 57-67.
19）橘直隆（2005）2002年度・2003年度学生による授業評価の報告．大学体育研究，27：77-86.
20）多胡陽介，永田靖章（2003）大学体育実技の学生による授業評価に関する比較研究－授業改善のために本学学生を手がかりとして－．聖泉論叢，11：39-59.
21）田村義男，五明公男，冨田公博，笠井淳，鈴木良則，吉田康伸，苅部俊二（2003）本学学生の正課体育・スポーツに対する意識調査に関する一考察. 法政大学体育・スポーツ研究センター紀要，21：1-9.
22）筑波大学体育センター（1994-2009）平成6~21年度共通科目「体育」教育課程.
23）徳永幹雄，多々納秀雄，橋本公雄，山本教人（1996）諸外国及び日本における大学保健体育教育の動向．健康科学，18：93-107.
24）Tsigilis N, Masmanidis T, and Koustelios A (2009) University students' satisfaction and effectiveness of campus recreation programs. Recreational Sports Journal, 33：65-77.
25）生方謙（2006）大学体育実技に対する学生のイメージ．自然人間社会，41：63-81.
26）蓬田高正, 吉田充, 加藤譲（2002）大学キャンプ実習が参加者の一般的因果律志向性に及ぼす影響．大学体育研究，24：35-42.